

20 セルリー

地域慣行基準

【化学肥料】

区分	窒素成分量 【kg/10a】	備考
5～6月出荷	96	県下全域
7月以降出荷	80	県下全域

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴及び吸収特性

安定した肥効を保たないと肉厚で繊維が少ない高品質なセルリーを収穫できない。

しかし、セルリーは吸肥力が弱い一方、かん水量は多く、在ほ期間も長いいため肥料成分が流亡しやすく肥切れを起こしやすい。セルリー栽培では肥料を有効に利用しにくい条件が重なっており、多肥となりやすい。セルリー栽培で環境にやさしい農業を推進するためにはこの様な特徴を理解した上で肥培管理を行う必要がある。

セルリーの**総窒素吸収量は20kg/10a**程度でありハクサイなどと比較しても特別多くはないが、ピーク時の窒素吸収量が多い上、土壌中の無機態窒素濃度がある程度高くないと十分な吸収ができない。一方で**窒素やカリの過剰は芯腐れ症を助長**するため肥培管理が難しい。

セルリーは施肥量が多いため緩効性肥料、有機配合化成、油粕、鶏ふんなどを組み合わせ合わせて利用する。**カリが過剰だとカルシウム、マグネシウム、ホウ素に対し拮抗作用**を及ぼし、吸収を抑制するので注意が必要である。施肥に当たっては前作肥料の残効や、堆肥中の肥料養成分量や地力も考慮する。

春まき作型におけるセルリーの窒素吸収パターンは次のとおりである。

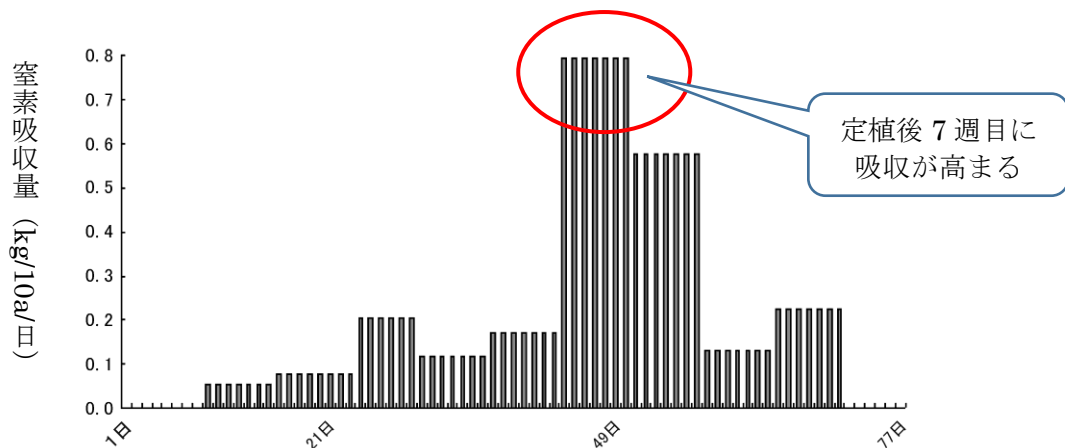


図 1 日当たりの窒素吸収量 (kg/10 a) (平成 19 年：佐久支場)

追肥は心葉が出始め葉が急速に大きくなる頃以降が重要となる。

セルリーの在ほ期間は70～90日と長めで、速効性窒素肥料を基肥に施肥した場合、生育後期の吸収のピーク時には肥切れしやすい。このため速効性化学肥料の施肥量の

増加が収量の増加に結びつかないことがある。堆肥はカリ、マグネシウム、ホウ素の優良な供給源となり、通路の敷きわらも有機物の供給源となる。

セルリーは水辺の植物としての特性を残しており、乾燥を嫌い**湿っているが水はけがよい土壌を好む**。健全な根を最後まで保つため土づくりをしっかりと行うことが必要である。堆肥や緑肥、有機質資材を鋤込み、必要ならば深耕するなどして土壌の排水性や通水性を改善する。また、肥効はかん水により影響を受けるため水管理にも気をつける。

目標収量と養分吸収量

目標収量(kg/10 a)	養分吸収量(kg/10 a)				
	窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土
6,000	18~22	8~10	60~70	18	6.5

セルリーの窒素吸収量は、定植後徐々に増加するが、定植後4週で脇芽欠きにより一時的に低下し、**7~8週でピークとなり**、収穫前1週間に再度増加する。窒素吸収パターンは脇芽欠きやかん水などの栽培管理の影響を受けやすい。

ピーク時の窒素吸収量が多いセルリーにとって、どのような肥効タイプの肥料を使うかは重要である。セルリーの窒素吸収のピーク時に十分な窒素肥効が得られるようセルリー栽培用に設計された肥料を用いるほか、緩効性肥料として有機物を活用し、肥料、堆肥、地力等からバランスよく窒素が供給されるように心がける。